

The Revolt of Islam における Shelley の理想的社会改革の希求

鈴木 里 奈

Abstract

This paper examines Percy Bysshe Shelley's revolutionary poem, *The Revolt of Islam*, and his idealistic theory as to a social reform. In this poem, Shelley quested for the new prospects of a social reform grounded on the analysis of the course of the French Revolution. Shelley's ideals concerning a social reform are clearly influenced by the philosophical ideas of William Godwin, a political philosopher. Specifically, he shared Godwin's gradualist theory of human progress adopted in his famous work, *Political Justice*.

Although it is definite that Shelley embraced Godwinian philosophy in which reason and universal benevolence are essential elements of human perfectibility, in some ways, he evolved his own ideas as to the ever-increasing stream of human enlightenment in his poem. The paper attempts to analyze the revolution and social reform which his protagonists direct, and explores Shelleyan philosophy of the everlasting human progress.

はじめに

“I consider Poetry very subordinate to moral and political science, and if I were well, certainly I should aspire to the latter.”

(PBS *Letters* 2 : 71)

これは政治詩人と呼ばれるに相応しいロマン派の詩人 Percy Bysshe Shelley (1792-1822) が1819年に Thomas Love Peacock (1785-1866) に宛てて書いた書簡の中の言葉である。Shelley の終生の政治への強い関心を

表明する言葉であり、彼の大作となるいくつかの革命詩の本質的源泉を示すものである。本稿で取り上げる長編詩 *The Revolt of Islam: A Poem in Twelve Cantos* (1817) は、Shelley がとりわけ政治詩人としての義務感から “political science” に執心して創作した詩の一つである。Napoleon 帝政の終焉後、ウィーン体制と自由主義・民族主義運動との衝突という19世紀の新しい革命の時代を迎えた政治詩人は、1790年代の英国急進主義者たちの精神に息づいていたフランス革命の思想或いは知的観念をこの詩の中に再創造しようと試みたのである (Cronin 97)。

Mary Shelley (1797-1851) のジャーナルによると、Shelley は詩の執筆を1817年3月にイタリアのマーロウにおいて開始し、半年後の9月に完成させている。その後、Shelley の熱心な出版活動により、詩は同年12月に Charles Ollier (1788-1859) を介して出版された¹。詩の出版に際しての Shelley の熱意と意欲は、「良い宣伝」を嘆願する彼の Ollier への手紙 (PBS *Letters* 1 : 592) で明らかである。また、William Godwin (1756-1836) に宛てた興味深い手紙には、Shelley のこの詩に寄せる自信とある種の決意とが表れている。

I listened with deference and self-suspicion to your censures of *Laon and Cythna*; but the productions of mine which you commend hold a very low place in my own esteem, and this reassured me, in some degree at least. The poem was produced by a series of thoughts which filled my mind with unbounded and sustained enthusiasm. I felt the precariousness of my life, and I resolved in this book to leave some records of myself. Much of what the volume contains was written with the same feeling, as real, though not so prophetic, as the communications of a dying man. (PBS *Letters* 1 : 577)

この手紙からわかるように、Shelley はこの詩を社会に向けた彼の最後のメッ

セージであるかのように考えている。彼の意図は、フランスの大政変の行程とその失敗の分析に基づく新たな社会改革の展望を表明することであり、19世紀のヨーロッパにおける改革運動を、1790年代の英国革命論争における Thomas Paine (1737-1809) や、とりわけ Godwin のように、言葉の力によって励まし、先導することである。Shelley は序文で次のように述べている。

I have sought to enlist the harmony of metrical language, the ethereal combinations of the fancy, the rapid and subtle transitions of human passion, all those elements which essentially compose a Poem, in the cause of a liberal and comprehensive morality; and in the view of kindling within the bosoms of my readers a virtuous enthusiasm for those doctrines of liberty and justice, that faith and hope in something good, which neither violence nor misrepresentation nor prejudice can ever totally extinguish among mankind.²

「19世紀のヴィジョン」という原題が示すように、Shelley は詩の中で、過去現在の人類の行為のパターンを想像的に未来に投影し、19世紀に起こるであろうと予期する一連の出来事を例証する。そうすることで彼は現在のあらゆる社会運動に実質的影響を与えようとしたのである (Cameron 314)。Shelley によればこの詩は現実社会を投影した “a mere human story without the smallest intermixture of supernatural interference” (PBS *Letters* 1 : 563) であり、これより前の長編詩 *Queen Mab* (1813) や *Alastor* (1815) に比べて非常に人間くさい物語と言える。これまでにアイルランド解放運動に直に参加し、Napoleon 戦争後の悲惨な情景と、もはや戦争特需に浴せなくなった英国における経済危機の社会的影響を目の当たりにした Shelley は、政治と社会構造に関する洞察を深め、それらの失態や歪みを最終的にすべて受け止めることとなる民衆への共感から、政治詩人として早急にこの詩に取り組んだのである。“this minute and active

sympathy with his fellow-creatures gives a thousandfold interest to his speculations, and stamps with reality his pleadings for the human race”³ という Mary Shelley の評釈はこの詩の本質を示していると言えるだろう。

The Revolt of Islam における Shelley の社会改革思想を論じるためには、この詩が1790年代の革命論争で重要な役割を果たした Godwin の *Enquiry Concerning Political Justice* (1793) における思想の影響を強く受けていることをまず認識しておかなければならない。この著作はフランス革命期において“(the) first text-book of the philosophical radicals” (Bonar 12) であったように、Shelley にとっても彼の改革思想の基盤を築いたものであった。詩の中で Shelley は社会改革者がどうあるべきかについて、明確に Godwin の思想を取り入れている。本稿では、この詩における Godwin 思想の影響について考察し、さらに、Shelley がいくつかの点で *Political Justice* における Godwin の改革論を発展させていることに注目したい。

William St Clair は *The Revolt of Islam* を “the new *Political Justice*” (434) であるとして次のように主張する。

Laon and Cythna is the successor to *Political Justice*, an attempt to adapt the truths of the old Enlightenment to the new post-revolutionary generation. If Godwin’s book — described as ‘unanswerable’ — was appropriate for the beginning of the French Revolution, a different approach was needed when its achievements had been swept away in terror, war, and repression. (431)

フランス革命の恐怖政治への転換期にあつて、社会改革の必然性を説き、啓蒙による人間と社会の無限の進歩を提示した Godwin の穏健な思想が *The Revolt of Islam* で希求される革命に敷衍されている。次章からは、この詩

における革命の推移を Godwin 思想と照らし合わせて確認しつつ、Shelley が社会改革の信念として導き出した思想について考察する。

1

The Revolt of Islam は「黄金の都市」、すなわち、コンスタンチノーブルを舞台とした、オスマン・トルコ帝国の圧制に反抗する英雄的ギリシア人 (Laon と Cythna) による革命の物語である。詩は全12篇から成る。超自然的な雰囲気排除した「純粋な人間の物語」の中で、詩人が “a distinct poem” であり、“very necessary to the wholeness of the work” (PBS *Letters* 1 : 563) であると説明する第1篇は、非常に寓意的な場面が始まる。フランス革命の挫折に失望した詩人が、夜明けの岬で “Eagle” と “Serpent” が空中で激しく闘う光景を目撃し、善の使者である美しい乙女に導かれて船旅に出発するのである。船が到着した燦然と輝く神殿の大広間には Homer や Milton、Mary Wollstonecraft を思わせる “The Great, who had departed from mankind” (I, liv, 605) が各々の玉座に座している。ここにきて、中央の玉座の主である “Serpent”、すなわち “the Spirit of Good” が詩人に向かって語り、“two mighty Spirits” を呼び出す⁴。

“They pour fresh light from Hope’s immortal urn;
A tale of human power — despair not — list and learn!”
(I, lviii, 647-8)

すると Laon と Cythna の聖霊が現れ、Laon が彼らの革命の物語を話し始めるのである。

この「人間の力の物語」の構成は多少複雑である。第2篇は Laon と Cythna の未遂の革命、3、4篇は Cythna と引き離された Laon の7年間の物語、5、6篇は「黄金の都市」での Laon と Cythna による革命とその

失敗、7篇から9篇は革命前に遡る Cythna の7年間の回想、そして10篇から12篇は彼らによる最後の改革の物語である。これは指導者 Laon と Cythna が圧制に苦しむ人類を盲目と惰性的無関心から覚醒させ、人類の前に不変の真理を示し、永続する人類と社会の進歩の基盤を築くまでの彼らの苦悩と成長の物語である。言い換えれば、詩は社会改革の方法論を説くものであり、とりわけ「改革指導者の在り方」を提示するものである。

この改革指導者の在り方について、まず Shelley は Godwin の思想を基本としている。Godwin は *Political Justice* において以下のように主張する。

．．． to raise those who are abased; to communicate to every man all genuine pleasures, to elevate every man to all true wisdom and to make all men participators of a liberal and comprehensive benevolence. This is the path in which the reformers of mankind ought to travel. This is the prize they should pursue. (395-6)⁵

生来理性的である人類を啓発によって現状に対する蒙昧な状態から覚醒させることが改革者の義務である。啓蒙され、判断力、すなわち“all true wisdom”を身につけた人々は、「必然の法則」により、利己よりも全体の利益を追求する精神、“a liberal and comprehensive benevolence”を獲得する。社会と人類の無限の進歩はこの精神から生まれるのである。Laon と Cythna の改革者としての軌跡はまさにこの“the path”を辿る。Shelley が序文において改革の大義として掲げる“a liberal and comprehensive morality”がこの Godwin の思想を基盤としていることは明確である。それでは Godwin 思想と共鳴する Laon と Cythna の改革者としての軌跡を追っていくことにする。

2 最初の革命と Laon の成長の物語：2 篇～4 篇

祖国ギリシアの民衆を圧制による苦難と隷属生活から解放するために Laon は Cythna と共に革命を決意する。フランス革命を擁護した思想家たちと同じように、革命指導者として Laon が武器とするものは、“a mine of magic store” (II, xx, 841) から引き出す真理を説く「言葉」の力である。そしてこの武器はとりわけ「詩」(“holy and heroic verse”) の力とされている。St Clair が “Prose was for the spring with the summer still ahead: in the deepening autumn only Poetry could effect a change” (431) と指摘しているように、ここには散文によって社会改革の大義を説いた Godwin らに引き続き、次代の改革を推進しようとする政治詩人としての Shelley の野心が窺える。

革命を前に Laon は民衆や同胞を奮起させるために以下のように語る。

It must be so — I will arise and waken
The multitude, and like a sulphurous hill,
Which on a sudden from its snows has shaken
The swoon of ages, it shall burst and fill
The world with cleansing fire; it must, it will —
It may not be restrained! . . . (II, xiv, 784-9)

この Laon の決起を示す重要な言葉について、P. M. S. Dawson は “we are meant to detect a certain overweening excess of optimism in Laon’s volcanic utterance” (70) と主張する。この後に続く革命が暴君オスマンの軍隊による襲撃によって早々に頓挫することを考えれば、その主張は的を射ていると思われる。この展開には Godwin 思想に影響を受けた Shelley の革命に対する見解が投影されている。フランスで起こった大政変は “the paradigm of revolution” を形成し、それ以降、ヨーロッパにお

いて“revolution”という言葉は自動的にフランス革命の由々しい行程と結び付けられるようになった (Duff 158)。すなわち、それは民衆の啓蒙の徹底を欠いたまま推し進められる急激な変化、流血革命のイメージを纏ったのである。Godwin は粗暴で血に塗れた革命を、寛容、独立、知的向上に有害なものとし、社会の進歩・改善の擁護者でありながら、その点で明確にフランス革命を非難した。彼の“The duty . . . of the true politician is to postpone revolution if he cannot entirely prevent it.” (*Political Justice* 281) という主張は、啓蒙の完全な浸透を伴わない革命の忌避と、忍耐強い漸進的改革の希求の表れである。

Shelley もまた、同じ思想に基づいて、Laon の革命を描く。彼は Godwin と同様に、“a nation of men who had been dupes and slaves for centuries were incapable of conducting themselves with the wisdom and tranquility of freemen so soon as some of their fetters were partially loosened” (Preface) という客観的事実から、“reform may come without revolution” (*PBS Letters* 1 : 513) という確信に至り、“a slow, gradual, silent change” (Preface) を希求するのである。Laon が試みた最初の革命は指導者である彼自身が暴力を行使し、啓蒙の芽を摘んでしまう結果に終わる。その結果、Cythna はオスマンのハーレムに女奴隷として連行され、Laon は高い丘の塔に幽閉される。

ここから、Shelley は Laon に改革指導者としての成長の期間を与える。その成長を手助けするのは、鎖に繋がれ、飢餓と苦悩の中で狂気に陥った Laon を救う一人の老人 (“Hermit”) である。隠者は7年間にわたって Laon を看護し、彼を狂気から目覚めさせる。Mary Shelley によるとこの隠者は Shelley の恩師、“Doctor Lind, who, when Shelley was at Eton, had often stood by to befriend and support him, and whose name he never mentioned without love and veneration”⁶ をモデルとした人物であるという。しかし一方で、当時の批評者が指摘するように、隠

者には Godwin の姿が投影されている⁷。彼が Laon に説く革命の信念は Godwin の思想と類似する。Godwin は理性的説得によって相手に真理を説き、忍耐強く相手の理性の覚醒を待つことを教える。人道主義の立場から、革命の手段としてのいかなる刑罰も強制もあってはならない。暴力や刑罰によって敵を倒しても、そこには新たな奴隸的服従が生まれるだけである。Godwin が繰り返し同時代の革命擁護者たちに説いたように、隠者は Laon を暴力に拠らない改革に駆り立てる。

“Perchance blood need not flow, if thou at length
Wouldst rise, perchance the very slaves would spare
Their brethren and themselves; great is the strength
Of words — . . . (IV, xviii, 1567-70)

ここでの隠者の教えを考慮すると、先に Laon が陥った凄まじい狂気は、武力抵抗を示した彼の自己悔悟と浄化のためのものであったと考えられる。

隠者はあの「黄金の都市」で一人の少女 Laone (名前を変えた Cythna) が “virtue’s adamantine eloquence” (IV, xix, 1581) を武器に革命を起こしていることを語り、Laon に都市の人々の期待に応え、これに加わるよう求める。

“If blood be shed, ’tis but a change and choice
Of bonds, — from slavery to cowardice
A wretched fall! — Uplift thy charmèd voice!
Pour on those evil men the love that lies
Hovering within those spirit-soothing eyes — . . .
(IV, xxviii, 1657-61)

Laon は隠者の教えを通して「人類愛」、「同胞愛」に基づく武力に拠らない合意と和解が自分の目指す改革の本質であると認識する。これは革命期にお

けるフランス政府の極端な粛清政策を根底から否定する倫理観を示している。改革者としての Laon の覚醒は、後の革命において暴君オスマンを含むすべての敵の断罪を斥ける彼の言葉に集約されている。

“ — the chastened will
Of virtue sees that justice is the light
Of love, and not revenge, and terror and despite.”
(V, xxxiv, 2023-5)

改革者として成長した Laon の言う侮蔑や復讐の無益を教える「愛」が、Shelley の理想的改革の以後の展開の鍵となっていく。

3 Cythna の成長の物語：7 篇～9 編

Laon の忍耐と成長の物語の裏ではもう一つの物語、Cythna の “a strange tale of strange endurance” (VII, iii, 2849) が同時進行で展開している。しかし先に述べたように、これは Laon と Cythna の7年間の別離、再び彼らが先導した革命とその失敗が語られた後に、フラッシュバックという形で始まる。David Duff はこの詩の構成に重要な意図を見出し、以下のように主張する。

. . . by Canto VII the reader has already acquired some understanding of the moral and psychological virtues which the poem is an attempt to inculcate. In terms of both the ordering of the narratives and the unfolding of ideas, Cythna’s quest effectively begins where Laon’s ends; and it is this that enables Shelley to maintain the teleological momentum of the poem . . . The point, then, is . . . that she represents a further refinement of the aspiration after excellence, a further step towards the Shelleyan ideal. (196)

Laon の物語と比較して、Cythna の物語が Shelley の理想的改革思想の更なる発展を示していることは確かであり、彼が “the teleological momentum of the poem” を意図して最後の改革の前に彼女の物語をもってきたと考えることは可能である。そしてその発展について、ここでは Laon が7年間の苦悩の末に掴んだ “the light of love” を更に発展させた、永続する社会と人類の進歩の鍵としての「愛」に焦点を当てて考察したい。この改革における「愛」の観念こそ、Shelley が “The great secret of morals”⁸、 “the sole law which should govern the moral world” (Preface) と呼ぶものである。

この詩の中で Cythna は永続する理想的社会において不可欠である「女性の解放」を担っている。

Never will peace and human nature meet
Till free and equal man and woman greet
Domestic peace; . . . (II, xxxvii, 994-6)

これは Laon の革命の決意の言葉であり、Cythna はこれに応じて “Can man be free if woman be a slave?” (II, xliii, 1045) という信念から、自分が「女性の解放」を担うことを告げる。この信念は、文明社会の発展は人類の啓蒙の度合いに伴って速度を増すものであるのに、人類の半数が無知と隷属の状態にあってどうして社会の進歩がなされるのかという Wollstonecraft の思想を継承するものである。Cythna の物語において語られる彼女の成長は “(an) allegory of the awakening of the female intellect and will to their real powers and capabilities” (Brown 182) であると考えられるが、それは同時に、人類の平等という観念が普遍的な愛の浸透によって初めて達成されるということの再認識のために改めて読者に示されたものである。そもそも Laon の「自由で平等な男女」の社会

を造るという決意は、一人の女性 Cythna を愛することによって生まれた、人間に対する共感が導き出したものであった。

Laon と引き離された Cythna はオスマンのハーレムに入れられ、その後黒海に浮かぶ島の洞窟に連れてこられる。狂気の中で Cythna は一人の子どもを生む。その子どもはオスマンの兵士によって連れ去られてしまうが、Cythna が経験した母としての愛情は、彼女を、等しく “one great mother” (II, xvii, 817) の子どもである人類に対する「愛」に導く。これをもって Cythna は “the prophetess of Love” (IX, xx, 3641) となる。洞窟を出た Cythna は人々に普遍的な愛が教えることについて語る。それは “To give to all an equal share of good”, “To track the steps of Freedom”, “to suffer all in patient mood”, “To weep for crime” (VIII, xi, 3294-7) である。この「愛」の観念は明らかに Godwin が示した改革者が辿る道と共鳴するものである。さらに Cythna は力強く語る。

“To feel the peace of self-contentment’s lot,
 To own all sympathies, and outrage none,
 And in the inmost bowers of sense and thought,
 Until life’s sunny day is quite gone down,
 To sit and smile with Joy, or, not alone,
 To kiss salt tears from the worn cheek of Woe;
 To live, as if to love and live were one, —
 (VIII, xii, 3298-3304)

これが Cythna の「愛」の教えることである。これについて *The Quarterly Review* の批評者は “Love is a wide word with many significations, and we are at a loss as to which of them he [Mr. Shelley] would have it now bear.” (Redpath 345) と指摘する。確かに普遍的な「愛」の観念が極めて多義的なものであることは事実であるが、しかし、ここで Cythna の説く「愛」が示すものは明確である。それは他を侵さないという

自己満足の精神であり、利他主義、共感、非暴力の精神である。この「愛」の精神は、Godwin の示す “a liberal and comprehensive benevolence” の観念を土台としたものである。

Godwin は、理性の覚醒は判断力を生み、それが必然的に人々を慈善の精神、すなわち “disinterested benevolence” に導くと説いた。これは自己よりも全体の利益 “public utility” を優先させる精神である。さらに彼は “Morality is that system of conduct which is determined by a consideration of the greatest general good.” (*Political Justice* 165-66) と主張する。Cythna の「愛」の観念は Godwin のこの「普遍的慈善」の精神の中に見出されたものである。しかし重要であるのは、Shelley の改革思想において、「愛」が「普遍的慈善」を飲み込んで発展したことである。Godwin の「慈善」が個人の集合体である「公」を重んじ、合理的且つ功利的なものであったのに対し、Shelley の「愛」は家庭的情愛を含む「公私」の領域にわたるものである。

Godwin によると、知覚する能力と判断力を生み出す「理性」は単に “a comparison and balancing of different feelings” (*Political Justice* 77) であって創造的な原理ではない。理性を行為へと導くものが知的教育である。Shelley はこの思想を継承しているが、創造の能力を持たない理性を補足するものとして彼が前面に押し出すのは「愛」である。“Love when Wisdom fails makes Cythna wise” (IX, xxxiv, 3772) という Cythna の言葉がそれを示している。Shelley の思想において「普遍的慈善」と「愛」の地位が逆転し、道徳において「愛」がすべてに先立つ源泉となり、すべてを包括する全体となった。「慈善」は「愛」の一つの要素となったのである。

Cythna の回想の物語と Laon と Cythna の愛の交歓は隠者の教えのように Laon を導き、彼は Cythna の精神を共有する。ここから二人は Godwin が提示した改革者の道の先を歩み始めるのである。すなわち、「愛」の究極の形としての「自己犠牲」が彼らの最後の改革の鍵になる。そのことを

Cythna は前もって予言している。

“This is the winter of the world; — and here
 We die, even as the winds of Autumn fade,
 Expiring in the frore and foggy air. —
 Behold! Spring comes, though we must pass, who made
 The promise of its birth, — even as the shade
 Which from our death, as from a mountain, flings
 The future, a broad sunrise; . . . (IX, xxv, 3685-91)

4 最後の改革：10篇～12篇

「黄金の都市」での二人の革命（5、6篇）は民衆を精神的に率いて一時的に成功するが、帝国主義諸国の介入、すなわち “the confederacy of the Rulers of the World” (Preface) のために失敗に終わった。これは明らかにフランスの共和制を攻撃したペルシアとオーストリアの軍事介入を客観的に描写したものである。詩の終わりに Shelley が示すものは、こうした歴史的事実の考察に基づくはるかに長期的な忍耐強い改革論である。暴君オスマンは再び王位を恢復し、都市では虐殺が繰り返され、疫病、飢饉が広がっていた。都市の荒廃の描写は Shelley がナポレオン戦争後に実際に目撃した “the theatre of the more visible ravages or tyranny and war”

(Preface) そのものである。疫病が暴君の宮殿にも襲いかかったとき、暴君は彼に従う僧侶たちと共に天の怒りを鎮めようと Laon と Cythna を探し出して生贄にしようとする。こうして火刑の準備が整えられるが、ここで先立つ革命での Cythna の「愛」の教えが民衆の心に浸透し始めていたことが明らかになる。というのは、Laon と Cythna の身代わりをかって、殉死を遂げる者たちが現れたのである。彼らは “moan / Like love” と “happy smiles, which sunk in white tranquility” (X, xlvi, 4222-4) と共に死んでいった。Ann Wroe が言うように、“Shelley’s awakened world” では、

“each man and woman turning outwards from the self to the other, with Love flowing like electric current through their clasped, determined hands” (334) が実現されるのである。

やがて Laon と Cythna は自ら火刑の場に姿を現し、捕らえられる。そして改革者としての義務を全うするために死を迎える。

. . . the mighty veil
Which doth divide the living and the dead
Was almost rent, the world grew dim and pale, —
(XII, xv, 4581-3)

知的啓発だけでは長らく蹂躪されてきた人々を導くことはできない。しかし指導者である Laon と Cythna が示した「自己犠牲」という目に見える「愛」の精神は、人間に備わった最低限の美徳にも訴える力を持っている。そしてそれは人々の心に永続する美徳の灯を残すのである。このことは彼らの処刑の後、苦悶する民衆の中から立ち上がった一人が、暴君たちに向かって放った言葉が証明する。

“These perish as the good and great of yore
Have perished, and their murderers will repent, —
(VII, xxviii, 4693-4)

. . . .
“And to long ages shall this hour be known;
And slowly shall its memory, ever burning,
Fill this dark night of things with an eternal morning.
(XII, xxix, 4708-10)

“For me the world is grown too void and cold,
Since Hope pursues immortal Destiny
With steps thus slow — therefore shall ye behold
How those who love, yet fear not, dare to die;

(XII, xxx, 4711-14)

この人間の言葉は今まさに起こり始めた“deep and mighty change” (XII, xxx, 4719) の前触れである。この“immortal Destiny”とは、「悪」を「悪」に、「善」を「善」に永遠に結び付ける不滅の法則“Necessity”である。この人間は Laon と Cythna が灯した希望は「善」の「必然」の流れに加わったことを示したのである。この“Necessity”の性質について、Kenneth Neill Cameron は以下のように述べている。

. . . historical change is regarded as being in the hands of necessity, but since necessity moves at its own pace, the hour of change has not yet come. Therefore, one can only add to the storehouse of good, in this instance by unselfish and inspiring sacrifice, so that when the hour does come, the change will be for the better. (339)

Laon と Cythna は「自己犠牲」という「愛」によって、永続する人間と社会の進歩、「完全性」への歩みの礎を築いた。そして彼らは第1篇で現れた過去の偉大な人々“the innocent and free, / Heroes, and Poets, and prevailing Sages” (IX, xxviii, 3713-4) に迎えられ、彼らの精神は未来の世代に影響を与える不断の鎖に加わったのである。

5 最後に

The Revolt of Islam において展開される改革の理念は、確かに Godwin の改革論に端を発した思想を土台としている。しかしながらこの作品は、Shelley が同じく社会改革をテーマとした *Queen Mab* のように、Godwin の *Political Justice* の韻文での書き換えであるというような評価を決して許さないものである。Shelley が提唱した改革の生命とも言える「愛」の思想が、

この詩を次代の改革を推進する “*the new Political Justice*” としたのである。

ただ、かつて *Political Justice* における Godwin の思想が、人間の理性を絶対的に信頼するあまり、現実性を伴わない楽観的理想論として批評されるに至ったように、この詩における Shelley の思想も、人間性への過度の信頼のために、現実的な社会改革論としてはあまりに理想主義的であるという非難は避けられないと思われる。また、詩があまりにも長く、構成と雰囲気との統一性に欠け、“realism” と “fantasy” とが不調和に混合されているという点は否めない (Cameron 311)。

こうした “Shelley’s defects” は Leigh Hunt の認めるところでもあった。しかしその一方で彼は、この詩の批評において、政治詩人としての Shelley に対し、“We have no doubt he [Shelley] is destined to be one of the leading spirits of his age, and indeed has already fallen into his place as such” (Redpath 332-33) という賞賛を送ったのである。

この詩は、難しい Spenser 連を Shelley が使いこなしているという点で評価されるが、Godwin 思想を吸収して発展させた「愛」の効用を基盤とする Shelley の理想的改革の理念が、これ以降の秀作 ‘Ode to the West Wind’ (1819) や *Prometheus Unbound* (1820) においてさらに研磨されることを考えれば、これが Shelley 思想の解釈の貴重な宝庫であることは間違いない。その意味で、“*The Revolt of Islam* was the last poem of his youth. It also contains the first work of his maturity.” (Holmes 402) との評価はこの詩に相応しいと言える。

Notes

- 1 1817年12月、この詩は *Laon and Cythna; or, the Revolution of the Golden City: A Vision of the Nineteenth Century in the Stanza of Spenser* という原題で出版された。しかし、その扇動的な表現が故の出版社に対する処罰を恐れた Ollier がすぐに市場から回収した。その後、詩は Shelley によるいくつかの表現や設定の改訂とタイトルの変更を受けて、2ヵ月後に再出版された。本稿に

- において引用した Shelley の手紙や批評には、この詩を原題のまま *Laon and Cythna* と表しているものが多い。
- 2 本稿中の *The Revolt of Islam* の引用はすべて A. H. Koszul, introd. *Shelley's Poems* (London: J. M. Dent, 1953) に拠る。
 - 3 “Note on *the Revolt of Islam*, by Mrs. Shelley.” Thomas Hutchinson, ed. *Shelley: Poetical Works* (Oxford: Oxford UP, 1970) p.157. からの引用である。
 - 4 第1篇の“Eagle”と“Serpent”の闘争において、一般的に悪魔の化身として忌み嫌われるグロテスクな“Serpent”を“the Spirit of Good”、威厳と力の象徴でもある“Eagle”を“the Spirit of Evil”としたことには *Queen Mab* において著しい詩人の因襲打破主義的な姿勢が見られる。乙女が詩人に語ることには、悪が善に勝利している現世において、人は善悪の判断力を失い、そのために王や聖職者が生まれ、圧制や戦争が絶え間なくなったという。人類の蒙昧さと惰性を生み出すあらゆる因襲を一掃するという意識から、Shelley は“Eagle”と“Serpent”の象徴的地位の逆転を試みている。
 - 5 本稿中の *Political Justice* の引用はすべて Isaac Kramnick, ed. *Enquiry Concerning Political Justice, and Its Influence on Morals and Happiness* (London: Penguin, 1985) に拠る。
 - 6 “Note on *the Revolt of Islam*, by Mrs. Shelley.” p.157.
 - 7 *The Quarterly Review* (April 1819) において、John Taylor Coleridge は冷笑的にこの隠者を“a sort of good stupid Archimago [Godwin]”と解釈している。Theodore Redpath, *The Young Romantics and Critical Opinion 1807-1824* (London: Harrap, 1973) p.344.
 - 8 ‘A Defence of Poetry.’ Carlos Baker, ed. *Selected Poetry and Prose of Percy Bysshe Shelley* (New York: Random House, 1951) p.502.

Works Cited

- Baker, Carlos, ed. *Selected Poetry and Prose of Percy Bysshe Shelley*. New York: Random House, 1951.
- Bonar, James. *Malthus and his Works*. London: Frank Cass, 1924.
- Brown, Nathaniel. *Sexuality and Feminism in Shelley*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1979.
- Cameron, Kenneth Neill. *Shelley: The Golden Years*. Cambridge: Harvard UP, 1974.
- Cronin, Richard. *Shelley's Poetic Thoughts*. Basingstoke: Macmillan, 1981.

- Dawson, P. M. S. *The Unacknowledged Legislator: Shelley and Politics*. Oxford: Clarendon, 1980.
- Duff, David. *Romance and Revolution: Shelley and the Politics of a Genre*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- Jones, Frederick, L., ed. *The Letters of Percy Bysshe Shelley*. 2vols. Oxford: Clarendon, 1964.
- Holmes, Richard. *Shelley the Pursuit*. London: Penguin, 1987.
- Hutchinson, Thomas, ed. *Shelley: Poetical Works*. Oxford: Oxford UP, 1970.
- Koszul, A. H., introd. *Shelley's Poems*. London: J. M. Dent, 1953.
- Kramnick, Isaac, ed. *Enquiry Concerning Political Justice, and Its Influence on Morals and Happiness*. London: Penguin, 1985.
- Redpath, Theodore. *The Young Romantics and Critical Opinion 1807-1824*. London: Harrap, 1973.
- St Clair, William. *The Godwins and the Shelleys: The Biography of a Family*. London: Faber and Faber, 1989.
- Wroe, Ann. *Being Shelley: The Poet's Search for Himself*. London: Jonathan Cape, 2007.
- 坂口周作『シェリーの世界—詩と「改革」のレトリック—』東京、金星堂、1987年。